人生の選択

南部中・３　市川　知春

「俺、やっぱり防大行くわ。」

覚悟を決めた兄の姿が、そこにはあった。兄は元々歴史が好きだった。小学生のとき、家族旅行で姫路城を訪れたことがきっかけで戦国時代にのめりこんだ。そこから、近現代史へ興味が広がり、国防を志すようになった。第一志望の防衛大学校の入試結果は最初、補欠合格だった。

「防大には行けないと思うけど、悔いはない。」

そう晴れやかな顔で語っていた兄のもとに防大からの合格通知が届いたのは、三月も下旬にさしかかった頃だった。第二志望の大学の入学手続きも完了し、あとは入学式を待つばかりだった。あと一週間で防大に行くか行かないか、結論を出さなければいけなかった。急に人生の大きな分岐点に立たされた兄は、一人で考え込み、その表情は苦悩に満ちていた。国防の道に進むか、歴史の道に進むか、兄にとっても両親にとっても苦しい選択だったに違いない。家族の意見も真っ二つに割れた。

「今更言われても覚悟はできん。」

「こんなに悩むなら不合格の方がよかった。」

「せっかく合格したのに行かなければ一生後悔する。」

「やらないで後悔するより、やって後悔した方がいい。」

そんな言葉が飛び交う中、兄の意志が固まったのは、現役防大生の先輩との出会いだった。

「僕は防大に入って良かったと思っています。

一般の大学では得られない経験ができます。」

そう真摯に語る先輩の言葉や人柄に触れ、家族の意見も一つにまとまった。

「迷ったら厳しい道を選べ。」

父の口癖だ。その言葉にも影響を受けたと私は思う。兄は市川家の十四代目として生まれ、幼い頃から、長男として家族の思いを感じながら育ってきた。この決断も家族の思いをくみとった兄らしい決断だったかもしれない。

いよいよ兄が旅立つ日、私と母と祖母で見送った。必死で涙をこらえていたが、兄の姿が見えなくなった途端、母も祖母も泣き崩れた。

「戦地に息子を送り出す母親の辛さがわかった。」

母はそう言って泣いていた。単純に大学生になる息子、だけでなく、防衛大という選択と、その先に見えてくる将来への、親としての思いがあふれたのだろう。旅立つ息子を誇りに思うと同時に、大変な運命を（息子に）背負わせてしまったと、母も苦しんでいるのがわかった。私も自然と涙があふれた。しばらく家族の心の中にぽっかり穴があいてしまった。寂しさと心配で悲しみに暮れていた。

しかし、それと同時に私たち家族の行動に変化が表れた。祖母は、

「孫が帰ってくるまでは元気でおりたい。」

と、より一層農業に精を出し

「息子が頑張っているのに親が泣き言は言えん。」

と、父は放射線技師の仕事をやりながら農業もこなしている。また、母は、今年から十年ぶりに小学校の担任になり、休日には父の農業の手伝いもしている。次男であるもう一人の兄は、勉強と部活の両立をしようと頑張っている。私は第一志望のレベルを上げ、塾が自習に積極的に行くようになった。兄の厳しい選択によって、家族みんながよい影響を受けていることを感じた。

兄の大学入学後、初めて兄と再会したとき、兄の表情はとても凛としていてかっこよかった。厳しい環境の中で己を鍛えるとこんなにも引き締まった顔になるのかと思った。あの短期間で厳しい選択

をして、食らいついて頑張っている兄を私は尊敬している。
　今年、私も受験生として、初めて自分で人生における一つの選択をすることになる。兄は兄で苦しい選択だったに違いないが、どこかうらやましさを感じている自分もいる。私は私で今まさに兄とは別の苦しさの中にいるからだ。
　兄は幼い頃から得意なことと苦手なことがはっきりしていた。数学が苦手な一方で、歴史の知識は両親も舌を巻くほどだった。
「あの子は得意なことを伸ばしてあげた方がいい。」
と、進路を考えるときも、あれこれ迷う必要がない程、歴史がずば抜けていた。何に興味があって、何が強みなのか明白だった。それは家族や周りだけでなく、兄本人が一番よくわかっていたと思う。
　それに対して、私はいまだに自分自身の方向性が定まっていない。
「大丈夫。俺は数学無理だけど、知春はオールマイティだから。」
と兄は言うけど、ずば抜けたものがないというのも辛いものだ。
「将来何になりたいのか。」
それがわかれば苦労はしない。受験のその先に目指すものが欲しいが、まだ見つからない。
見つからないけど、ぼんやりとしたものはある。祖母が私（の将来の選択肢の一つ）に言っていた「税理士」という職業である。それが、どのような職業で、自分に本当に合っているのかは、見当がつかない。
　兄は自分で考え、自分で選択して自分の人生を歩んでいるが、私は兄のようには、なれない。幼い頃、動物園で同じきりんを見て、同じように写生していたはずなのに、通りゆく人は、兄に「上手だね」と声をかけていた。私には、何も声がかからなかった。現在も、同じなのだろう。私は同じように進路について悩んでいる（はず）なのに、他の人から見ると、兄のそれとは違うように見えているのだろう。
　今後の人生もおそらく選択の連続だろう。答えのない中で、迷い苦しみ、もがきながらそれでも人は選択をしていかなければならないのだと、兄が苦しみの中で決断をする姿を見て強く感じた。選択は、辛く苦しい時がある。でも、その苦しみから逃げずに自分と向き合いながら、私らしい答えを見つけていきたい。選択の理由を尋ねられたら、こう答えてみたい。
「迷ったから厳しい道を選んでみた。」
と。

30・9

　お兄さんの姿を通して、知春さんが自分自身を見つめ直し、進路に対して決意を固めていく様子が丁寧に書かれています。家族のつながりや、あたたかさも感じられる作品です。

（指導　二　橋　嗣　予）